狼につけられた時

俗に謂ふ送り狼、狼が後から付いて來るのは、轉んだら喰はうの目算である。私の聞く處によると、さうした場合には、帶を解いて一重だけ體に卷いて結んで、あとを長く尻尾のやうにさげて歩く。さうして居ると狼は馬鹿なもので、その尻尾のあとへ付いてくる、もし轉んでもそれだけの長さがあるから狼が飛びつかない。その中には起きあがる、と謂ふのであるが、試して見る氣にもならない。

傳說と小說

人に化けた狼

今更ら人狼傳說でもないが、これも義理で、滿更ら知らん顏も出來ない。人狼傳說と謂へば先づどこにでもある共通のものがある。筋は似たりよつたりだが歸する處は同一である。

一人の男が、(國によつて飛脚になつたり、獵夫になつたり、武者修業の侍になつたり、形は變つてゐるが、動作は一つである)、火急の用があつて夜峠にかかる。狼に追ひつめられて大木によじ登る。(夜の山路で產に苦しむ旅の女を救けて、大木の上に枝を組んで休せる、と謂ふのもある)。狼が肩車になつてその男を奪はふとする。もう少しで奪れない。すると狼共が何々の婆を呼んで來いと謂ふ。やがて一匹の年經た大きな狼がやつて來て、肩車の上に乘つて男に咬み付かうとする。男が刀で(或は斧で)斬りつける。狼は斬られて轉げ落ちる。他の狼共も逃げて行く。夜が明けてやつと命が助かる。何々の婆あと謂つたのが氣になつて、その村に行つて見る。(何々の婆々と謂ふ場合は、その主人の名を冠せる。彌三郎婆々とか彦七婆々とか、その家は鍛冶屋とか、寺とかが多い)。そこの家の婆々と謂ふのが、昨夜便所へ行く時轉んで怪俄をしたと、頭を布で卷いて臥てゐる。峠の男の顏を見ると、狼になつて飛びかかり、結局其の男に殺される。

この話が持廻つたやうに諸國にある。今それと明かに謂へるのは、土佐と阿波との國境に

近い野根山。出雲國松江では檜山になつてゐる。越後の柏崎では漆山にあつた事にしてある。これが彌三郎婆々と謂つて、今だに幅を利かしてゐる。他のは其場で退治られるが、この彌三郎婆々だけは破風を蹴破つて八石山に逃げて、岩屋に隱れ、赤の日傘に赤の法衣の葬式と見ると、空宙から棺をさらつて、屍を食ふ。後には堂を立てて神に祭つてあると聞く。

處でこの通りのが支那にもあるからうるさい。松陽(浙江省)の樵夫が二匹の虎に追はれて木に逃げのぼる。虎が飛付いても届かない。一虎謂ふ、朱都事を呼んで來いと。一虎が番をし、一虎が呼びに行く。やがての事朱都事なる虎がやつて來る。肩車の一番上に乘つて、汝一口と樵夫に飛びかかる。樵夫は一生懸命に、腰の斧で拂ふ。それが虎の前脚に當る。三虎とも駭いて逃げ去る。その夜は木の上に明して、村に出て來た樵夫は、村の人に朱都事と謂ふ人はないかと訊くと、東の村にさう謂ふ名の人がゐるが、まさか虎に化けて人を奪る事もあるまい。まあ行つて見やうと、五六人連立つて行く。近所で樣子をきくと、朱都事は昨夜何處かへ行つて、手へ怪俄をして來たさうだ、今は寢てゐると謂ふ。疑ひは益々深くなる。多勢をかり集めてその家を圍むと、忽然一匹の大虎が飛びだした。彌次馬は逃げる。後で家

へ入つて見ると朱都事の姿はどこにも見えなかつた。

虎と狼の違ひはあるが、形は日本の人狼傳說その儘ではないか。虎ではいけないとなら、直ぐと間に合ふ狼のがある。

話が聊か古い。時代は唐の永泰年間、今から千百六十一年の昔に、正平(山西省)と謂ふ村に一人の老人があつた。重い病氣で一年餘りも臥てゐたが、漸つと癒つた。その中ふら〳〵と家を出て、何處へ行つたか行方が知れなかつた。その村の或る男が山へ仕事に行くと、歸り路に大きな狼に付けられた。恐しさに逃げも逃げられず、大木によじ登ると、狼もまた飛びついて來た。今は命がけ、斧で拂ふと、狼の額にあたつた。傷は相當甚かつたか、木から落ちて地上で苦んでゐたが、その中何處へか姿をかくした。男は怖さに一夜をその木の上で明して、下りて來ると狼の足跡にまじつて血が滴つてゐる。それをつけて來ると、自分の村の、例の長病ひで臥てゐる老人の家まで續いてゐた。男は密かにそこの息子を呼び出して、仔細を話した。息子は謂ふ、老父は昨夜遲くどこからか歸つてゐる、而も額に手酷い傷をうけてゐると、とに角もと繩で縛ると、狼になつた。多勢して打殺して了つた。

結局此種の人狼傳說は、山西省正平のでも、越後柏崎のでも、どちらが兄だか弟だか判つたものではない。双生兒の產れた時、後から生れたのが兄の、前のが弟のと謂つてゐても湯に入れて同じ着物を着せて了へば、どちらがとちらだか判らなくなる。いやほんの一分間眼を閉じてゐれば、兄も弟もわからなくなる。

狼に化ける術

やりかけた次手だから、人が狼になつた話を續ける。これも支那で、永泰の年の末、或る村の若い男が、重い病氣で永々病つた果、氣が狂つたが、癒ると狼に化ける術を自得した。災難なのは村の小兒だ。あばよ、芝よ、金杉よ、蛙が鳴くから、歸ろう、ぱら〳〵散つた雀色時、叱れるのも知らずに母の膝に歸つて行く。そこを捉へて、鷲に捕まつた鳩か雀か、ぱりぱりと頭から食はれて了ふ。親は案外暢氣なもの、神隱しだらう位に考へて、只管に無事の歸りを待ちわびてゐる。而も悲しい哉、狼の腹に葬られた兒が、何で再び父母の前に出現しやう。甲の家、乙の家、東家、西家、鍛冶屋の子も行方が知れない、庄屋の娘も何處かへ

か掠はれ、たと謂ふ調子で、神隱しにしろ天狗の若衆にしろ、餘り數が多すぎる。狼なる若者は、舊は人に雇はれて日仕事をしてゐた。何も知らない村の人の一人が、通りがかりに若者に、『明日家へ仕事に來ておくれ、晩飯を御馳走しやう』と聲をかけた。この人も神佛でないから、自分の子供が此日雇ひの腹でこなされてゐやうとは知りやうがない。怪しからずや若者はふふんと鼻の先で嘲笑つた。『御免蒙りませう、最うあなたの家には食べるやうな子供はありませんから』——とかうだ。その人は以前氣の狂つた者の言葉とばかりは聽き流さなかつた。自分の秘藏の子供が行方知れずになつてゐる。怪奇なる若者と、直さまその襟首をひつ摑んだ。地に引きすゑて嚴しく責め問ふと、『昨日も一人丸々と肥つた兒を捕つて食つたが、子供の甘さは忘れられない』と謂ふ。忽ち多勢が集まつて來て、若者の口を押あけて見ると、未だ血が生々しく口一ぱいを染めてゐた。村中の人々の、怨みと憎しみの力に打殺され、大きな狼になつて死んだ。

母か狼か

猫婆々、狼婆々、婆々は兎角化けたがる。王將軍の母堂も流石に年には勝たれなくなつた。此人は元來が漢の人種ではない。外蠻の胡人を父にも母にも有つてゐた。その故もあらうが若い時から男も傍により付けない程の勇猛拔群で、强弓を腰につけて荒馬を犬の如くに扱ひ山野を我が庭のやうに飛び廻つてゐた。熊や猿は此女將軍の蹄の音を耳にすると、怖れまどふて逃げ隱れた。そのやうに逞しく猛々しい女勇士も、この頃では體がめつきり弱つて了つて、一室に閉ぢ籠つて睡てばかりゐた。それに不思議なのは、侍女なぞは一寸でも室の內へ入れさせない。息子の王將軍にさへ、なるべく顏を合さないやうにしてゐる。母堂の扉は何時も內から堅く鎖してあつた。

或る夜、侍女の一人が、最う先刻扉に內から貫木をさして、眠たらしいのに、また內から開いたのを聽きつけた。はて變な事もあるものだと覗くと、一匹の大きな狼が內から出て外へ行つた。驚いて下僕達に話した。室を見ると母公は影もない。皆して一夜樣子を覗つてゐた。すると曉方にまた先刻の狼が室に入つて行くのを見た。

彼等の驚駭知るべしである。眞ぐさま將軍のお耳に入れた。

將軍は半信半疑、まさかに自分の母が狼に化つてゐやうとは思へない。それからは自身樣子を覗つてゐると、驚かるる哉、疑は解けて信の一字が堅く明かになつた。將軍は如何したものかと思案に餘つた。狼を母として公へ仕へる事は出來ない、と謂つて母になつてゐる以上は殺すことも出來ない。

今日は鹿の肉が食べたいと御機嫌よく母公が仰せられた。念入りに料理してさし上げると忽ち御機嫌麗しからずなつて、『なぜこんな料理なぞしやるのぢや、妾は生の儘食べたいのぢや』と仰せられた。今度は將軍自ら生の鹿肉を捧げると、大層な御喜びで、手づかみで生の儘、何もつけずに舌皷を打つて召上られた。

御隱居さまは狼だ——この噂は將軍の館の外にまで流れ出た。王將軍は彌々思案に行詰つた。どうしたら好いのか困りきつた。その噂が今度は遂に母公の耳に入つたのか、一夜狼が扉を咥み破つて出て行くのを見た。噂にゐたたまれなく成つたのであらうか。二度と狼は歸つて來なかつた。王將軍の母公の姿は、永久にその堂から消へ失せた。

話はまだある。

厓州の農夫に孫と謂ふ人、その母は七十をすぎてから、兩の手に剛い毛が生えはじめた。不思議な事に思つてゐると、毛は段々と廣がつて、終に身體中一ぱいになつて了つた。長さが一寸もある。その中に背が丸くなつて、尻尾まで生えた。孫も家族も淺猿しい事に思つて他人にはその姿を秘し隱して見せないやうにしてゐると、一日突然地上に倒れ、忽ち白い狼に變つて了つた。狼になつては、如何に實の子の家でも居にくひと見えて、飛びだして行方も知れずなつた。

孫も家族も、お婆さんを急に失くしたので悲しかつた。然し狼がゐなくなつたのが悅しかつた。知せないやうにしても、近隣の人達は、よく知つてゐた。孫の家のお婆さんは、狼に化つて家出したのだといふ專らの噂。孫の家の人達は外聞のわるい日を送つてゐた。

親子の恩愛の情は狼に化つても變りはなかつた。月に一度か二度は家に姿を現はして、家族の顏を泌々見まはしては、子や嫁や孫達の與へる御馳走をさもおいしもうに食べて、またすごすごと出て行つた。近所の人達はそれが怖くつて仕方がなかつた。寄り寄りに相談した。もしもの事があつては大變だ。今度來たら退治して了はうと、弓箭や槍を用意してゐ

た。

それを孫達が聞つけて父に告げた。狼に化つても母は母、母を殺さしては子として道にかけてゐる。何とか好い法はあるまいか、と孫は考へ續けた。

母なる狼が來た。孫は豫て用意して置いた肉を御馳走して、さて改つて謂つてきかせた。『お婆さんや、來てくれるのは嬉しいけれど、隣り近所の人達が怖がつて困る。お婆さんを見つけ次第殺して了ふと手筈がしてあるからもしもの事があつては私達は泣いても泣ききれない。私達にそんな悲しい思ひをさせるのが厭ならもうこれかぎり、姿を見せないやうにして下さい』。狼は首をうな垂れて悄々と聽いてゐたが、悲しい聲で啼いた。子や孫達の顏をさも殘り惜しさうに見廻して、なか〳〵行きさうもない。

孫は氣が氣でなかつた。さつき啼いた聲をききつけて、近所でその仕度をしやしまいかと心配した。戸をあけて、そこらを窺つたが、何も影はなかつた。疾く行つたが好いと手で知らせる。母は一散に驅つて姿を隱した。それきり母は孫の家を尋ねて來なくなつた。

どれをも通じて支那のは、狼に化る者は、先づ重い病氣に罹つて、それから狼になる。こ

れが日本の猫婆になると、何時と謂ふ事なしに猫になつてゐる。人目を嫌つたり、熱い物を食べなくなつたり、生の魚が好きになつたり、骨も殘さずばりばり音をさして食べるやうになると、どうも御隱居さまは此頃變だと謂ふ事になる。退治る。床の下から人間の骨と母の着物が出る。猫なり狼なりが人間を食つて人間に化けてゐる。そこが支那では、人間が自然と狼になつて行くのが面白い。狼が人間を食つて人間に化けるよりか、自然に人間が狼になる、いくら此方が凄いか知れない。

戀人を殺した男

章と謂ふ若い男が山で獵をしてゐる中に日は暮れて了つた。どうした運か此日は山の幸が甚だ薄い。袋には兎一匹入つてゐない。この得物のない日には、きつと不思議な事がある。それは多くは凶であつて、どこの誰でも同じであつた。章もその不思議な運が迫つてゐた故か此日の不獵はその爲であつたのだが、當人は知りやう筈もない。一歩一歩に暗くなる。歸りの路は知れなくなる。仕方なくなつて岩の根を枕に横になると、暫くは空の星の瞬くのを眺

めてゐたが、その中に眠つて了つた。夢ともなく現ともなく、咽喉を誰かが嘗めてゐる。薄氣味惡くなつて目をさますと、人だ。女だ。夜目によくは見えないが、匂ひで若さが推はれる。何故咽喉を嘗めてゐたかと尋ねても、唯勘忍してくれと計り。然し摑んだ手を振りもぎつて逃げやうともしない。そこへまた女が出て來た。恐しく背の高い痩せた女だ。前の女の乳母だそうで、お孃さまの惡戯を頻りに詫びて、今夜は私達の家へ來て泊つてくれと謂ふ。喜んで從いて行くと、此の山にはつひぞ見かけない小綺麗な家がある。燈火の下で見ると、色の白い美しい娘、章はすつかり嬉しくなつて、そこに泊る。

夜が明けても章はその家から出ようとはしない。昨夜晩飯の御馳走になつたが、それから後、娘がまたお膳をすえたらしい。勿論章は遠慮なんかしてはいない。有り難い事に思つて三拜して箸をとつた。斯うなつては金輪際、出て行けと謂はれても、出て行くものでない。ずるずるべつたりに腰をすえて、時にはォイなどと亭主らしい聲をだす。

この二人の女は、晝どこへか出て行く。この山の中で、歩く處もあるまいにと章は不思議に思つた。何處へ行くかと訊くと、この先の谷に伯母さまがお居でになる、そこへ遊びにと

謂ふ。章は眼の色まで變えて驚いた。『あすこは狼の巣です、飛んでもない、危險千萬、何故あんな所へ行くのです、お止めなさい、止めて下さい』。それでも二人の女は平氣な顏をしてまたしても出掛けた。

此の山の中だから有るのが當然なのだが、章が獵しもしない鹿や兎が何時も臺所にある。初めは變に思つたが、これも伯母から貰つて來るのだなと思ふやうになつた。それにしても狼が氣になつて仕方がない。よし殺してやれと、伯母のゐると謂ふ谷へ通ふ路へ、鹿の肉に箭に塗る毒を塗つて投げて置いた。これで狼を懲して置けば、幾干か危險は輕くなると思つて。

その夜二人の女は歸つて來なかつた。或ひは伯母の家へ泊つたかとは思ひながら、心配の一夜を明した。夜が明けると早速出て行つた。伯母の家へである。然し伯母の家まで行かない中に、二人の女は見つかつた。二匹の狼が彼の仕掛けた毒肉の側に死んでゐた。章の驚から忽然二人の女とその家とが失くなつた。

落語に存在する怪談

菓子が甘いばかりでは面白くない。「玉だれ」だの、「スヒンクス」のやうなのが有ればこそ妙なのである。落語だからとても然うだ。どれも〳〵表面から裏面まで、可笑い通しでは嬉しくない。中には氣が氣でないのや（鰍澤のやうな）、慄然とするやうなのがあればこそ（「もう半分」とか「貸家探し」とか）、味の異つた面白味があるのである。單純は人を飽きさせずにはおかない。天邪鬼は誰しもの通有性である。私はいま落語から怪談らしいのを探し出して見やうと思ふ。私の研究は酢豆腐であらうか。私はさうした不眞面で怪談を研究してゐるのではない。怪談の中から怖くない怪談を得たいと心掛けると齊しく、笑ふが生命の落語の中から、身柱の寒くなるやうな氣分を得たいのであろ。

私は漸つとの思ひで、これだけを得た。「田能久」「七度狐」「狸の釜」「藁人形」「もう半分」「いがぐり」「脛かじり」「野晒」「たちきり」「反魂香」「不動坊火焔」「三年目」「貸家探し」「おすわどん」「へつついの幽靈」と十五ある。思つたより多かつた。これ程あらうとは思はなかつた。これでまだ屑として捨たのが五つはあるから、殘らず集めたら二十はある。

部門分けにして其要領を書いて見る。先づ畜生から初める。

田能久

旅役者の田能久は行暮れて山奥の破屋に宿る。大蛇が老人に化けて來て田能久を呑まうとしたが、一體貴樣は何だと訊くと、田能久だと答へる。狸では呑んでも甘くないからと止める。田能久は九死に一生を得た。話をしてゐる中に、貴樣は何が一番怖いかと訊れて、金が一番怖いと答へる。さうか、乃公は金なんか怖くはない、煙草の脂が何よりも怖い。けれど此樣なことを人に話すまいぞ、話たが最後、俺は仇をかへすぞよ。そこで夜は明けて、田能久はとある村に下りて來た。饒舌な田能久は、つひ口を辷らせ煙草の脂を話した。家へ歸つ

て寢てゐると、夜更けて戸を叩く者がある。開けると件の大蛇の老人、血だらけなのが、さも怨めしさうに睨めつけて、思ひ知れと箱をなげつけて消え失せた。裡にはお金が一ぱい。

この話はよく出來てゐる。さけも言葉でさけずに、言はず語らずにしてあるのが古風で好い。狸ぢや呑めないも面白いが、金が怖いで、大蛇が目に物見せるつもりで金箱をなげつけるのは有難い。聽手の中にはどれ程この怖さを味ひたい人があるか知れない。然し此話は、單にさうした茶氣のある空想から出發したものではない。昔から國々に遺る傳說から出たに他ならない。山國にはよく持合せる物語で、盲人の琵琶法師が大蛇の化けたのに會ふ話である。處により國により琵琶が三味線になつたり笛になつたりしてゐるが、話の筋はどれも混ぜ物なしに一つである。越後では、岩船郡下關の大倉權現の由來として、出羽の大石田越では時森明神の由來として、或ひはまた羽前米澤から越後村上へ越へる蛇骨峠では、そこに祭られた三味線堂の由來として、そしてその時から峠の名が、座頭峠と呼ばれるやうに成つたとしてある。どちらにしても澤山に數えきれない程ある。先づ一人の座頭が琵琶を背にしてその峠にかかる。型の如く行暮れて、軒をかるべき家もない。樹下に野宿の寂しさをまぎら

さん爲めに、琵琶を彈くと、誰やら物の氣配がして、面白し、いま一曲と所望する。一曲また一曲、夜は何時しか去つて曉近くおぼえると、その物厚く禮を述べて、さて改めて謂ふやう、明日麓の里へ下るとも、心して脚を留むる勿れ、永く留らば御身は水底の魚屑とならうと、座頭駭ぎながら未だその意を解せず、疑しみ尋ねると、今は何をか隱さん、我は此山の主なる大蛇である。七日の中に此麓の里を一圓の湖とせんず目論見、一夜を琵琶に慰められたる禮心に、汝にのみ告げ知せる、夢にも他に洩すまいぞ、一言にても他言に及ばば、立所に命は無きものと思へと立去る。座頭思ふやう、里の人何百人の生命を思へば、不具の此身一人は物の數ならず、しかず、身を殺して里人何百にかはらんにはと、麓に下りて人々にこれを明す。村々の人々驚き恐れて、澤山の大釘を山の寸地も餘さず打込んでその大蛇を殺した。村々の人々は湖底の魚とならずに命助かつたが、座頭は大蛇の怨恨に悶え苦んで落命する。この傳說を上手にこなしたので、盲人法師にしずに旅役者にしたのも働きなら、悶え死なんかは落語として面白くないから金箱をなげ込ませる。氣の利いた換骨法だ。多く前座が話すが、これを旨く噺し得る前座は殆んどない。味のある噺だが、さて大頭株も話したがら

ない。話のやりとりが人間同志でないのと、言葉も少ないので、やり難いのだとか。

七度び狐

旅人が茶見世で、竹の子と烏賊の木芽あへを當り鉢ぐるみちよろまかした。鉢を捨ると寢てゐた狐に當つた。この狐は七たび狐と謂つて、魅したら七度化さなければ氣が濟まないと謂ふ厄介ものである。旅人は散々化しぬかれる。三人の百姓が見兼て、狐を藪に追込む。尻尾を摑へて捕へやうとすると尻尾がぬける。氣がついて見ると畠の大根をぬいてゐた。とこれ丈では根つから面白くないが、その七度びに化されて行く化されやうが、化されてゐると思ひながら遂さう思つてない樣な化されの面白味がある。元來上方種であるから灰が强い。聽く落語ではない、見る落語である。

狸の釜

これは前座がよく噺す。高座にお近いお客さまでも先刻御存知。子供に半殺しにされてゐ

る狸公を助けてやる。夜になつて狸が禮に來て、御恩返しと、紙幣に化けたり、蓑ころに化けたりして、男の急場を救ふ。釜に化けて寺に賣れる。男は半金貰つて歸る。火にかけられて耐らなくなつて逃げだす。釜ではなかつた、狸だつた、道理で半金騙られた、と謂つた塵梅式の有難からぬ代物なのである。此の話と「七度狐」とを比較すると、狐の執拗なのと、狸公の愛嬌のあるのが、躍如として來る。落語に使ふ化ける畜類としては、狸に越す適材はない。

畜類はこれで終りとして、人間の怨靈に移る。怨靈も、金と戀とに分ける。先づ金の怨靈である。

もう半分

ある橋の袂の居酒屋へ見すぼらしい老爺が飲みに來た。一杯注がれては酒が旨くないと謂つて半分づつ注いで貰ふ。もう半分、もう半分と、大分飲んだ。轉けるやうに出て行つた跡に、財布が置き忘れてあつた。亭主が調べると百兩ある。やがて老爺がまつ蒼になつて引返

して來て、財布を忘れた、どうぞ返してくれと謂ふ。慾に目の昏んだ亭主はとり合ない。泣いて縋るのを突つ放して往來に突出す。爺さんは八百屋で、娘を女郎に賣つた百兩を、酒の爲めに見す〳〵盜れた。酒の爲に身代を呑み潰し、大切の娘を賣つた金はまた酒の爲めに失つて了つた。娘に合せる顏がないと、居酒屋の亭主を怨み恨んで身を投げた。酒屋はその百兩からとり付いて、店は日ましに榮えて立派になる。女房が男の兒を產んだ。體こそ赤ん坊だが、髮は白髮で、顏は例の怨み死の爺さんそつくりである。女房は血があがつて死んで了つた。乳母を抱へて育てても、その乳母が三日と居つかない。仔細を訊くと、夜半が怖いから居られないと震へる。亭主が試みに隣りの座敷で樣子を窺ふと、丑滿頃、赤ん坊はむつくり起きあがつて、行燈の油を嘗る。亭主仰天して化け物と聲を立てると、赤ん坊は振向いて「もう半分」。

これが落語であらうか。怪談、立派な怪談だ。私が此話を寄席できいた時は、名もない程の落語家からであつたが、その落の「もう半分」に至つて私は慄然とした。何と謂ふ不氣味な筋であらう。生れた兒の顏が爺さんそつくり、それだけでも不快でならないのを、殊さら

に夜半に「もう半分」と爺さんの假聲をつかはせる。私はこれを作した人が何故落語としたのかを怪しむ。私は落語に存在する怪談としては、先づ此話を第一に指を屈る。他のは幾干怖くつても、底を破れば終局には漸つと落語だつたつけと笑ひを催すが、この話ばかりは始めから終ひまで笑へない。笑ふ處か、どゝの詰りに呼吸の音をとめられる。私は此話が落語にあるのが、それが既に怪談であると思つてゐる。私は厭だ、再度と聽きたくない。

次ぎは戀の怨靈である。

いが栗

旅人が深山に行暮れた。漸つと辻堂を尋ねあてて椽に腰を落すと、いが栗頭の怖い坊主がをる。何を尋ねても一言も返事をしない。氣味が惡くなつてすた〳〵行きすぎると一軒の破屋があつた。旅の者で難澁します、どうぞ今夜一晩宿めてくれと賴み入る。老婆はそれは最易い事、宿めて進せたいが、家の娘は眞夜半になると苦しみだす。枕もとに恐しい坊主が現はれて娘を惱す。その噂に村にもゐ難くなつて斯うした山の中に隱れたのだが、それさへ御

承知なら宿つて行かつしやれ。旅人は、その怖さは辛抱しやうから、是非宿てくれと草鞋をぬいだ。夜半になると娘は苦しみだす。その枕もとには辻堂にゐたいが栗坊主が立つてゐた。夜が明けてから旅人は、老婆に、娘の病氣は私が治してあげると謂つて出た。辻堂まで來ると、まだ坊主はゐた。旅人は坊主に、『お前が餘りいじめたものだから、娘は遂々死んで了つた』と謂ふと、坊主は『娘も死んだか』、と一言謂つたきり、身體は消えるやうに崩れて骨が地に落ちた。旅人は老婆の家に引返して來ると、娘は大相病氣が快くなつたと謂つてゐる。旅人はその譯を話すと、親子は旅人を伏拜んで喜んだ。二三日して娘の病氣は全く快くなつた。老婆は旅人を再生の恩人として、娘の聟になつてくれと賴む。旅人は承知した。再び舊の村に歸つて來て、舊の家で祝言する。其夜半に天井から何か落ちて來た。見ると、いが栗ではないか、『まだいが栗が祟つてゐるな』。これも無理に落語にしたやうな筋である。(土地の習慣として鼠の穴にはいが栗を押込んで置く、その土地と謂ふのは忘れたが)。さけで無理に落語にしてあるものゝ、結構でも筋の動きやうでも立派に怪談に成りきつてゐる。落語として聽いて、些しも可笑くない。怪談として聽されても、成程と首肯ける。さうした場合

偶然に鼠がいが栗を落しても、彼の坊主を思ひだして慄然とする。此話も「もう半分」と共に落語に存在すべきものでない。怪談が落語に紛れ込んだものと怪しまれる程凄い話である。それに此材料がいくらも怪談にある。最も似つかはしい、いやこれから出たなと思はれるのは、「入定の執念」と謂ふ話である。大和の國郡山高市の郡、妙通山清閑寺の觀音堂の堂守惠達と謂ふのが、觀世音の夢想の御告であるからと、承應の元年三月廿一日、阿彌陀ヶ原に入定した。時に年六十一。それから五十五年經つた寶永の三年まで、塚の裡からは鐘の音が聽えてゐた。阿彌陀ヶ原の念佛塚と、生佛のやうに尊れた。寶永三年の秋八月、大風が吹いて標の松が根こぎに倒れた。鐘の音はまざ〳〵と塚からもれて來る。未代の不思議と百姓共塚を崩して覗ふに、棺の裡には惠達未だ死せず、髮髭は銀の針のやうに、身は灰のやうに成つてなほ念佛を申してゐた。庄屋の源右衛門、何とて此世に執念を留めて往生せぬかと詰る。惠達虫よりも幽かな聲枯々に、入定の砌、十念を授けた十八九の美女が念に懸つて、未だに成佛の障りとなる。庄屋その美女を探し求めると、米倉村の庄八郎の娘るりと知れた。連れて來たのを見ると、髮は黄に、目は凹み、一片の齒もなく、人の肩に縋つてよろばひ出た。

庄屋惠達に謂ふやう、この姥こそその美女、その時十九今は七十三歳、惠達見るより愛着の念朝日の前の霜と消えて、見る〳〵皮肉もとけて白骨ばかりとなる。それから鐘の音は聽えずなつた、と謂ふので、五十何年も經つても、未だその娘が十七八と思つてゐる惠達は、可成りお目出度い頭の持主ではないか。

更にもう一話、これは戀にも金にも二途かけての怨靈である。いまは亡き圓右獨特の凄い噺。

藁人形

千住に西念と謂ふ坊主があつた、(どうも坊主ばかり續いて御氣の毒さまであるが、これも何かの因緣かも知れない)。鉦を鳴しては淺草まわりを貫つて歩く。千住の女郎屋若松のおくまと謂ふのが、西念が小金を溜めてゐるのを知つて、朋輩と睦をして、西念を欺して呼びあげて、手管で三十兩の金を捲きあげた。その後西念は金に困つてお熊に借りに行くと、木で鼻の挨拶、とう〳〵睦でお前の金を捲あげたのだ、何でお前なんかの自由になるものかと、

惡體雜言を極める。西念口惜さに胸ぐらを奪るのを、男達が外に突出す。額は破れ顏は血に染つて淺猿しの姿。おろおろと庵室に戻つて、その儘どつと床についた。傳馬町の牢から出て來た甥の甚吉が看病してやる。西念は厠に行く時にも、きつと甚吉に、爐にかけてある鍋の中を見るなと、氣にして戒める。そこで甚吉もお約束の如く、見るなと謂はれて、なほ見たい。厠の不在に鍋をのぞくと、わら人形が油煎にしてある。慄然として、蓋をしたが、厠から戻つた西念は、甚吉の顏の色のただならないのにそれと知つて、鍋の中を見たらうと詰る。甚吉も最初は何とか彼とかごまかしたが、終に隱しおほせずに見たと白狀する。わら人形なら五寸釘なのを、何で油煎にするのかと訊くと、『あの女は糠屋の娘だから』。つまり釘は利かないと謂ふ洒落だ。折角引締めて來た面白さを、この俗惡なさげで尠からず減殺されてしまふ。いま落と謂ふ二三分前に耳を掩ぐのが氣分を傷けない賢い方法である。何とかしてもつと働きのある落をつけたいものだが、わら人形では此位のものか。此話は圓右に聽いて眞の面白さを覺える。彼の齒をむきだして覗つ込んで噺す顏、その坊主を見るやうだ。而も今や世界を異にしてゐる。聽く由もない。この噺もこれきりで、噺す人もなく、聽く人もな

い。今日の所謂落語家と謂ふ輩、私なぞよりも噺しの下手なる者共、鹿にもなれず馬にもなれず馬鹿にもなれぬ連中には、圓右の昔を偲ぶべくもない。落語の數は斯うして段々減つて行く。そして終には落語は亡びるのだ。……「いが栗」「もう半分」は死靈の怖さ、「わら人形」は生靈の怖さ、三つある怨靈の、どれもが世界が別々で、それ〳〵肌が異つてゐるのに特殊の味ひがある。就中この「わら人形」は、女郎屋の華やかな空氣、老ひ枯れた貧相な門乞ひの坊主、宿場の阿婆摺、愛想づかし、突出されて顏に血をあびて、牢歸りの甥の看病、鍋の中の油煎のわら人形、宛として二番目のものだ。十五ある落語の中の怪談の中で、芝居味のあるのではこれに上越すのはない。「もう半分」はその儘の怪談、「たちきり」は情話味、(後出)。味はつて來ると落語の怪談はなか〳〵會心の興がある。

戀の怨靈の序手に同じ戀の怪談を披露する。けれどこれは野暮に怖らしいのではない。優しみのある意氣筋である。

たちきり

若旦那の清十郎は吉原の藝者小夏に熱くなつた果が田舎の親類に預けられた。一年餘りは音沙汰なしに經ぎた。許されて江戸へ歸つて來たが、外出は法度である、田舎と違つて同じ江戸では。小夏に逢ひたい、顏が見たい。父が交際で不在の蹤を甘く拔出て頭の家へ行く。樣子をきくと、可憐や小夏は、清十郎を思ひ詰めて、それが因で病死したと。清十郎の涙、察するも餘りある。頭と共に一人寂しく暮してゐる小夏の母親を訪ねて、慰め慰められて、泣きかはす。佛壇を見ると新しい三味線がある。小夏が大相大事にした物であるが、まだ一度も御座敷へは持つて出ない中に冥途の人となつた。今日は命日だから手向に出して置いたと母が語る。清十郎も遊んだ果、三味線をとりあけて調子を合せて佛前に置くと、三味線は自然に鳴りだして一中節の「紙治」を彈いた。その中にぱたりと音が止る。もう少し聽きたいものをと清十郎が惜がる。母親は、『音が止る筈で御座います、御佛壇の御線香がたちきりました』。嘶の輪廓なり、內容なり、若旦那、出入の頭、吉原藝者、一中節の紙治、その遺愛の三味線、目に見えぬ人の手に鳴される。まさに鏡花獨專の舞臺なり筋書なりである。この三味線が自然に鳴つて紙治を彈くの時、私達の眼には白鷺のやうな清楚な小夏が影繪のやうに

見えて來る。落語に存在する怪談の中で、是程美しい怪異はまたとない。そのまた若旦那と謂ふのが、落語に在來の馬鹿旦那ではなくつて、靜かなものの解つた、何さま吉原藝者を焦れ死にしさうな男で、頭もまた苦勞人、母親が娘が逢ひたがつてゐたのを涙片手に物語るの時、清十郎でないお客さまの眼が暗くなる。落語と思へない慕しさがある。その美しい人が見えずに三味線が自然に鳴るのは、怪談美として上々の物である。斯うした結構は支那が最も多くを有つてゐる怪異であるが、私はこの嘶の成立は、筋が出來あがつてからさげを拵へたのではなくして、さげが出來てゐて、それから筋が組立たものと見るのが當れりである、と謂ふ證據は、文化版の小嘶の本「江戸嬉笑」に、斯う謂ふものがある。

反魂香

さる家の息子ある遊里の藝者と色筆にて二世三世といふうまい中なりしが、痲疹のために藝者は身まかり、跡にのこりてかの息子たゞくよ〳〵とあこがれて居たりしが、不圖反魂香を思ひ出し、小さな香爐へ線香を立て、珠數爪くりて唱名なせば、不思議やドロ〳〵

になり、藝者の姿すッくと現はれ、にッと流し目で見ながら、オヤ嬉しいのと言ふ。あゝよく姿を見せてくれた、そなたに別れてその後は、ト、しみ〴〵話しをする間もなく、あれ〳〵閻王のお迎ひしけし、さやうならばと立上るを、やれ待て少時と裾にすがれば、幽靈ちよいと振かへり、もう線香がたちやした。

即ちたちきりである。このさけをつかまへて、それに藝者の死。遠く支那を引張りだす迄もなく、この噺の生れ場所は推量が出來るが、美しい寂のある怪談である。

話の生れ場所として反魂香が出たから、恰度よい、續いて此方の怪談もそれにする。

反魂香

この噺は大抵の人が知つてゐる。けれど落語の中の怪談と謂ふ點から止る譯にも行かずに持だす。仙臺高尾の情人は島田重三郎、高尾は太守に斬られて亡き人となつた。重三郎は中々に思ひ斷るべくもない。夜更けては反魂の香を炷いて誦名念佛する。香の烟の裡に高尾の姿が現はれる。切めてもの心やりである。同じ長屋の八五郎、俺もそいぢやあ三年前に死なれた

女房に逢ひたいものだと、反魂香を忘れて、越中富山の反魂丹をたく。けれど一向に女房が現はれない。すると外で女の聲、八さん〳〵、さては來たかと戸を開けると、女房お梅と思ひの外、隣家のかゝあ、『八ッさん、氣をおつけよ、臭くつて仕樣がないぢやないか』。

これには八五郎と謂ふ先刻御承知のがら〳〵が出るから、高尾も重三郎も惚れげが薄くなる。「たちきり」は上品で、ある種の通人には喜ばれるが、一般のお客さまには此「反魂香」の方が受が好い。こんなのは百姓の多い東京の寄席では永持のする種なのだ。遠慮もなくげら〳〵お笑ひなさる山の手のお客には御滿足の代物なのである。勿論私は好かない。聽きたくない。

戀に續いて夫婦關係で調べて見ると、三つが三つとも後妻と先妻の思ひである。

三年目

噺は詰らないが、私達の研究の上からは好い拵へである。怪談の味があつて落語の意氣を失はない點が面白い。これは小噺を其儘引延したものである。

女房の死ぬ時に、決して後添は貰はないと契つた。女房は、『もしお前さんこの約束に反いて、二度目のおかみさんを貰ひなすつたら、わたしや怨みを謂ひに來るよ』、と謂ひ遺して、亭主が決して貰はないよの一言に、安心して息を引取つた。さて亭主、約束はしたもの、、男一人では仕末に行かない。まして昨日まで女房のあつた身では、何かにつけて不自由で寂しくつて仕方がない。勸める者のあつたを好い汐に、後妻を迎えた。けれど先妻の臨終の際の言葉が怖さに夫婦とは名のみであつた。幽靈はどうしたか出ない。忘れたのかと思つた。七日たつた。半月たつた。一月が三月たつても、先妻の幽靈は音沙汰なしである。知つてない筈もあるまいに、口ほどにもない女だなぞと、亭主は腹の中で思つた。安心して初めて夫婦の式をあげたが、それでも未だ出て來ない。すると恰然三年目の、先妻の命日の眞夜半、初めて幽靈は夫婦の枕近に現はれた。亭主、怨みがあるのなら何故もつと早く出て來ない。三年の間何をしてゐた。女房恥しさうに、『こうぞりをされてから、髪の毛がのびませんでしたから、伸るまで待つてゐました』。——色氣のあるのが面白い。幽靈になつても女のたしなみを失はない心掛が嬉しい。

おすわどん

夜の丑滿となると、軒に近く雨戸の外で、それは〳〵陰氣な聲で、おすわどん——先妻が亡くなつて後添に直つた女の名がおすわ、先妻が怨みに來るものと、おすわはとう〳〵氣病に病んで床についた。噂を聞きつけて一人の武藝者、よし怨靈にせよ妖怪にせよ、拙者が正體見届けくれると、泊り込んで待構へると、やがて其夜丑滿の刻、果せる哉、聲は町の彼方から風のまにまに、おすわどん。さてこそと押つとり刀で雨戸蹴開けば四つ角に夜鷹そば。

落は所謂語呂落であるが、罪がなくつて輕い。この話は、聲ききつけて武藝者が飛びだす外には夜鷹そばが啼いてゐた、それ丈の方がどの位味が深いか知れないのに、落語家なぞと謂ふ無分別者は、折角自然の落が立派にあるものを、それを活用しずに、とくに聲はりあげて、おすわどん。それよりも甚いのになると、おすわどんと聲をあげて置いて、くどくも更におそばうどんと解釋をつけるのがある。己の血のめぐりの惡いのを以てお客さまの頭を量る、呆れ果る哉、到底敎ゆべからずである。この噺は落語としても働いてゐるし、怪談とし

ては面白い。幽靈を出さずに、その聲だけで人を釣つて行く考が面白い。怪談としても、聲ばかりで影のないのは一層怖さがます。然し嘶しにくい話だ。嘶しよいやうで嘶しにくい話だ。

つぎも後妻の祟り、上手に氣味を悪がらせる。

貸家さがし

貸家を探して家主へいろ〳〵の人が來る。その中に一人が熱心に借りたいと謂ふので、大屋も乗氣になつて、お前さんのやうな人には是非貸したい、從いては私の身の上嘶も聽いて貰ひたいと、身の上話を始める。初め貰つた女房はふとした風邪が因で亡界の人となつた。當分の中は寂しいのも不自由も辛抱して鰥夫暮を守つてゐたが、遂々後妻を迎へた。後妻は心の優しい女で、毎朝毎朝先妻の位牌にお茶湯をあげた。あげやうとして御佛壇に向ふと、お位牌が何時もくるりと後向きになつてゐる。鼠か何かの悪戯と思つて、直して置いても、夜が明けると後向きになつてゐる。さては私が先のおかみさんの氣に入らないのに相異ない

欠

MISSING

連意甚だ平かでない。既にして策略成つて、長屋の一人落語家の前座が幽靈になつて引窓からぶら下る。燒酎酒の火がぼーうと燃えて、家根の上で薄どろが鳴る。夫婦は何だか家根の上で變な音がするので臺所へ出て見ると、何だか人間がぶら下つてゐる。咎めると、不動坊火焔の幽靈だと謂ふ。巫山戯るな、囘向は充分にしてやつたのに、何が不足で化けて來た、まだ浮れないのか。『それだから宙にぶら下つてゐる』。これが落だから呆れもされない。てんで成つてゐない。下らないから話のうまい者は話さない。前座畑の出し物になつてゐる。

腥かぢり

これも下らない。お情け次手に一束にして形づける。或る男が女房を貰つたが、此女は一の疵がある。夜の丑滿になると外に出るのだ。男はそれを承知で貰つたのだが、一向出るやうな樣子がない。半月ばかり經つと近所の寺に葬式があつた。するとその夜になつて女房は家をぬけ出た。亭主も氣になるので後をつけると、件の新佛を堀りかへして食ひはじめた。亭主は顫えあがる。女房は夫のゐるのに氣がついて、いまのを見たかと訊く。亭主、生命ば

かりは助けてくれ。女房は泣きながら、これが私の病、人の肉を食べなければ生きてゐられない、此樣な淺猿しい樣を見られて何で生きてゐられやう、身を投げて死ぬと驅けだすのを、亭主留めて、さう恥かしがる事はない、己なんか親父の脛を嚙りとほしだ。いやはや何とも御氣の毒極る不出來此上なしのお嘶だ。こんなのを今だにちら〳〵用ひる奴があるから、なほ情けない。

野晒

これは大方の皆さん先刻御承知で入らつしやる。或る士族が零落して長屋に詫しく暮してゐる。釣を此上もない樂にしてゐる。一日向嶋へ釣に行くと廬間に一つの骸骨を見つけた。酒を濺いで一句手向けてやる。その夜美しい女が來て、お影さまで極樂に行れると禮を述べて、泊つて行つた。玆に同じ長屋の八五郎、怪しからず美しがつて、委細その男から傳授を乞ひ、早速向嶋に行く。釣れても釣れなくつても何うでも好い。(水かさ增る大川の、上汐南に物凄く、淺草寺の入相の鐘陰に籠つて、ぼうん)ー骸骨はざらにあつた。八五郎嬉しがつ

て滅茶苦茶に酒をぶちまけて、手向の句なんかは出鱈目、それよりか自分の長屋を精しく謂ひ聽せて歸つて來る。それを聽いたのが船に留守番をしてゐた幇間、夜になると八五郎の軒の戸をとんとん〳〵。來たなと戸を開けると、女ではなくつて、面の厭に光る男が立つてゐる。手前は何だ。太鼓持でげす。何、太鼓だ。そいぢやあ先刻のは馬の骨だつたか。

これは「反魂香」と同じ行き方である。反魂香よりか話が落語式に作られてある。野晒と謂ふ題が好い。話の肌は月並のお客さま向きで、怪談味のあるものではない。

寵の幽靈

これもお情け組の代物である。寵を買ひに行つて、それが買ひたいと謂ふと、これには何か譯がありそうだ、何度賣つても三日と經ぬ中に返されて來る、まあ買はない方がいいでせうと謂ふ。いや是非それが欲しい、氣に入つた。それぢやあ進げませう、その代り返しに來ちや不可ません。喜んで貰つて歸ると、その夜へつついから幽靈が出て、博奕で勝つた金が百兩塗り込んである、頓死したので誰とも知れずに無緣に投込みにしてある。お經が充分で

ないので行く所へ行かれない、どうか百兩だしてくれ。賴まれた男、半金くれたら出してやらう。幽靈が承諾する。出してやると幽靈は博奕が好き、ここで一丁やらうぢやないかといふ。やると幽靈が負けて山分けの五十兩奪れて了ふ。つぎの夜は友達を集めて勝負してゐると、また幽靈が出る。まだ金に氣が殘つてゐるのかと訊くと、『せめて寺だけでもやらせてくれ』。

まだ他には、幽靈車だの、捻兵士だのがあるが、幽靈車は二人乘の人力車が出るから明治も十年から十七八年の頃に噺されたらしい。女房に死なれた車夫が赤ん坊を懷にして車を挽いてゐる。客が不憫に思つていろ〳〵と訊いてやると、この通りの貧乏で乳も呑せられず、それを氣の毒に思つて女房が夜になると出て來て、乳を飲せてくれる。坂にかかると車の後を押してくれるので助かるなぞと謂ふ。折柄闇の九段坂、客は後から女房の幽靈が後押しをしてゐるので氣も魂も身に添はず、酒代をやつて中途で下りる、こんなに戴いては勿體ないと謂ふのを振もぎつて逃げながら、なる程幽靈車だ、道理でおあしがないと謂ふ落。何でも明治の十四五年に、こんな噂のあつたのを落語に取入れたのださうだ。こんなのがあると謂ふ

申譯までに登錄して置く。「捻兵士」またの名を「樟腦玉」とも謂ふ。女房に死なれて閉ぢ込んでゐる捻兵士を、よき食物と長屋の二人、樟腦玉に火をつけてぶら下げたり、引窓から白い物を見せたりしていたかに怖がらせ、その明る日一人が行つて、その話を釣り出して話させて、それはおかみさんの氣が殘つてゐるのだらう。何でもおかみさんの遺して逝つた物は着物でも道具でも寺へ納めるが好い、何なら己が持つて行つてやらうと甘く欺していろ〳〵と卷きあげたが、それでもまだ卷きあげたく、また樟腦玉を使つて、その明る日出かける。もう女房の氣の殘りさうな物は寺へ納めつくして、ないと謂ふ。それでも未だ何かあるだらう、捻兵士漸つとの事に搜しだしたのが雛人形、大方これにでも氣が殘つてゐるのだらうと箱から出して見て、いやこれだ、これに氣が殘つてゐる。『魂の匂ひがする』。

この噺はもつと前の方へ出す品であるのを、つひ忘れて仕舞に成つて思ひ出したのだ。話し口から落語になつてゐて、茶番を落語にしたやうな噺の筋だが、さげが利いてゐる。魂の匂ひが振つてゐる。亡くなつた圓右が得意のもの。私が聽いた落語の中の怪談で、未だに耳にも眼にも殘つてゐるのは、先づ第一が小さんの「貸家探し」、その大屋なり、借りに來た搗

屋なり、例の小さん一流の人物が活躍してゐた。殊にも米揭唄が耳に殘つてゐる。その次ぎが圓右の「わら人形」とこの「樟腦玉」だ。圓右はもう聽れない。今小さんから「貸家探し」を聽いても、昔日の感興は得べくもない。世間がてんで怪談に耳目を有つて居ない今日、聽手もなければ、噺し手もない。吾吾が圓右や小さんや某やらから聽いたのが最後の聲であつたのだ。

何故林屋正藏の怪談に一言も及ばぬかと仰有るか。私は怪談が好きだが、所謂怪談噺は大嫌ひだ。てんで水が合はない。昔でこそ、——いやそれも昔らしい昔ではない、私が十七八の頃までは(三十年前)未だ〳〵その林屋正藏が得々と追出を勸めてゐた。軒看板のほの暗い紅の輪廓の裡に、怪談噺林屋正藏、手をあげるを合圖に灯をぱつと消して、『はて恐しい執念ぢやなあ』、なんかと、青硝子をはめた洋燈をお化の顏にさし向けて、彼の眞つ四角な皺だらけの顏へ、大きくそしてばく〳〵になつた口をへの字に結んで、當人としては好い氣持らしく勸めてゐたが、もう其頃では女も洒々としたもので、賴んでもきやつともすうとも謂ふのぢやなかつた。一體若い子が怖がりながら、而も色氣七分で、男の膝などに突伏したのは、

三馬の浮世床ではて殘念鬢四間の先生が、りんおくしようぞう、と讀んだ林屋正藏時代の事だ。怪談噺は芝屋のお岩さまや小幡小平次や累に刺擊されて、發達して客も從いたのだが、元來が泰平の遊民の玩具だ、何うの彼うのと謂ふべき代物ぢやない。唯昔の人間は、彼の茶氣滿の空氣に浸りながら、それを怖がつて、或ひはわざと剛がつたりした稚氣が嬉しい、賴母しい。それでこそ洒落もわかれば戲談も謂へる人間らしい人間だ。今のやうに、洒落は通用せず、戲談を謂へばさも品性を傷つけられかのやうに厭あな顏をする。謂はば人間味のない動物の群集、洒落や戲談が謂へればこそ人間の有難さだ。犬や馬には謂はれない。月給日の晩にたまあに寄席へ行つて、明る日はさも一ぱしの贅澤でもしたやうな顏をして自慢らしく昨夜は寄席へ行つたよとくる。壽限無や道灌を無上に面白いものと相場をきめて、落語なら知らぬものはないと仰有る。こんなのもあるよと親切に話してやれば、反つて侮辱でもされたやうに返事もしない。お客が斯うだから職業人も從つてだ。ひとつ噺が滿足にまくらから疊み込んで落のつけられるのが何人ある。笑ひさへすれば自分の藝がうまいからと自惚を起して、なほの事これでもかと擽る。五音が人なみでないのが學校を出て月給にありついて

洋服を着て紳士だと仰せられる。その百姓が笑へば藝が甘いのか。椋鳥は都の下女を見ても綺麗に見える。茶番を見てもこれが芝居かと感心する。千人の喝采よりもだ、一人の微笑こそ値あるものを、呪はれよ、亡べ、一人殘らず死んぢまへ今の話家。席亭には氣の毒だが、斯うでもなしなければ好い芽は出ない。

怪談噺と謂ふものも、私達の見聽したのが終焉であつた。千年の後は知らず、孫子の代にはまだ蘇生すべきものではない。もしも後々、怪談噺とは如何なるものかなぞと、大學あたりで額に脂汗をにじませて研究とかを始めたら、その時こそ、私達が、高慢ちきな顏をして一場の知つたか振の店を擴げるのだらう。今にして思ふ、その時代には、日本中をあげて、林屋正藏を、りんおくしようじうと讀むに相異ない。豈嬉しからざらんやではないか。

私が玆に、落語に存在する怪談として拾ひ上げたのは、どれもが、所謂怪談噺のやうにお岩さまや小平次の刺擊をうけて成立つたのではない。芝居と對抗しての寄席の怪談味は、殘らず怪談噺が背負つて立つた。怪談屋以外の落語家の話す怪談は、芝居なぞには頓着なく自分自儘に生成したのである。故にその生れ故鄕がはつきりしてゐる。申して見やうなら、「田

能久」と「いが栗」は傳說から、「狸の釜」はお伽噺から、「たちきり」「反魂省」「三年目」は小噺から。この調子で、ただひとつ「わら人形」だけが芝居らしいが、ただそれは單に二番目らしいと謂ふのみに留つて、情話の首と胴へ、落語の尻尾をつけたのだ。もう謂ふべき事も謂ひ盡したやうな氣がする。これでこの篇は終りとする。閑人の知つたか振のやうに思はれるかも知れないが、何年かの後には、この調べ書も、一ぱしの參考になることを保證して置く。

民俗怪異篇 ——終——

日本民俗叢書刊行の言葉

土に還れといふ合言葉からやがて日本に還れといふ標語が生れて來た。永い間見失つてゐた吾等が祖先と同胞の姿を見出し、其の環境の源に遡る時、吾等は吾等自身の行手に眼覺めるであらう。民俗の探究は其の爲めに役立つのである。玆に民俗とは必ずしも狹義の民俗學に限定するを要しない。廣く吾等に親しき民習風俗を闡明し、來るべき時代を迎ふる炬火とするが好い。吾が「日本民俗叢書」は卽ち此の意味に於て、極めて多方面から極めて多樣なる研究題目を捉へ來り、之を今日及び明日の人々に示さうとするものである。

編輯者

日本民俗叢書既刊書目

1 民俗斷篇　早稲田大學教授　西村眞次
2 民俗と建築　早稲田大學教授　今和次郎
3 江戸情調　文學博士　笹川種郎
5 染織史考　明石染人
6 島國の唄と踊　國學院大學教授　田邊尙雄
7 民俗怪異篇　磯清
8 支那の民俗　永尾龍造

各一冊四六判布裝函入
定價壹圓七拾錢送料拾錢

昭和二年七月七日印刷
昭和二年七月十日發行

▲民俗怪異篇▼
【定價金壹圓七拾錢】

著者　磯清
發行者　東京市日本橋區鐵砲町六番地　磯部辰次郎
印刷者　東京市芝區愛宕町二丁目十五番地　林傳一郎
印刷所　東京市芝區愛宕町二丁目十五番地　三賞印刷合資會社

不許複製

發行所　東京市日本橋區鐵砲町六番地　磯部甲陽堂
振替東京一五〇五六番
電話浅花六九五一番

法學博士 岡田朝太郎著 **寛政改革と柳樽の改版** 四六版布裝 定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢

同 隨筆 **虛心觀** 四六版布裝 定價金貳圓參拾錢 送料金拾八錢

松村範三著 **川柳日本俗說史** 新四六布裝 定價金拾貳圓 送料金拾貳錢

文學博士 笹川種郎著 **江戸情調** 四六版布裝 定價金壹圓七拾錢 送料金拾錢

西村眞次著 **民俗斷篇** 四六版布裝 定價金壹圓七拾錢 送料金拾錢

磯清著 **民俗怪異篇** 四六版布裝 定價金壹圓七拾錢 送料金拾錢

田邊尙雄著 **島國の唄と踊** 四六版布裝 定價金壹圓七拾錢 送料金拾錢

岡本一平著 **世界一周の繪手紙** 四六版布裝 定價金參圓 送料金拾八錢

岡本一平著 **一平傑作集** 新四六布裝 定價金參圓 送料金拾八錢

岡本一平著 **泣虫寺の夜話** 四六版布裝 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢

560
20